

## ショーペンハウアーの『意志と表象としての世界』第一巻における知覚の虚妄の問題

鳥越 覚生

Das Problem der Falschheit der Wahrnehmung in Schopenhauers erstem Buch  
*der Welt als Wille und Vorstellung*.

Kakusei TORIGOE

Von Schopenhauers erstem Buch der *Welt als Wille und Vorstellung* aus betrachte ich das Problem der Falschheit. Insbesondere untersuche ich das “Doppelsehen”, eine Art von Illusion, angemerkt. Denn Schopenhauer analysiert es in doppelter Weise; Vor dem Jahr 1814 studiert er es hauptsächlich in Zusammenhang mit Kausalität, aber danach im Zusammenhang mit dem Sehen. Erst in dieser Lehre vom Sehen deutlich das falsche Data. Daher möchte ich die Bedeutung des falschen Data in Schopenhauers Philosophie hervorheben. Auf diesem Weg kann ich aufweisen, dass es neben der Nichtigkeit, welche von der Form der reinen Sinnlichkeit angeleitet wird, auch die Illusion, welche von der Materie der Sinnlichkeit gebracht wird, gibt. Beide finden sich im ersten Buch. Also müssen wir das Problem der Falschheit der Wahrnehmung im ersten Buch in doppelter Weise erneut studieren.

「目による考察は欺きに満ちているということ、また耳や他の感覚器官による考察も欺きに満ちていることを指摘し」  
(プラトン『パイドン』 83A)

## はじめに 「虚妄」について

知覚と思考という二分法を容認するならば、知覚の虚偽は錯覚とされ、思考の虚偽は誤謬とされる<sup>1</sup>。これは西洋哲学では、古代ギリシャの感覚と知識の問題に由来する<sup>2</sup>。この伝統的な問題の論点の一つである錯覚について、ショーペンハウアー (Arthur Schopenhauer 1788-1860) の思想を整理してみたい。

さて、ショーペンハウアーのテキストには随所に「錯覚 Illusion」についての言及がある。また、これと紛らわしい表現として、主観である私たちが目で見て、手で触れていると思っている対象である客観は、「夢のように虚しい表象」であり、バラモン教の「マーヤー」であるといった記述が散見される。これらは一般に「知覚 perception, Wahrnehmung」と言われる領域での「真理」と「虚偽」を問題としていると理解できるが、その内実はどうなのであろうか。ショーペンハウアー哲学の内部で、「錯覚」、「夢」、「マーヤー」といった言葉は無造作に使われているのであろうか。それともなんらかの使い分けがあるのであろうか。ひとまず、ショーペンハウアーの思想を整理して、彼の哲学における「知覚の虚偽」の問題を明らかにしてみたい。

しかしながら、「知覚の虚偽」という言葉からしてすでに、注意が必要である。というのも、ショーペンハウアーは私たちが日常で知覚する世界を夢や虚無と結びつけるが、「知覚の虚偽」を「錯覚」と理解する立場からすると、「夢」や「マーヤー」を「錯覚」とまとめて考察することは難しいからである。例えば、「夢」は「知覚の虚偽」なのであろうか。仮に私たちが夢のなかで知覚しているとしても、夢における形象は虚偽なのであろうか。さらに、「知覚の虚偽」を「錯覚」とすることさえも問題があるように思える。なぜならば、「知覚の虚偽」であれ「錯覚」であれ、それが指示していることは必ずしも明白ではないからである。例えば、以下のような疑問が考えられる<sup>3</sup>。

第一に、「知覚の虚偽」と言う場合、知覚とは何を指しているのであろうか。私たちの五官の各々の知覚の全てを指しているのであろうか。そして、知覚が虚偽という場合、それは五官の全ての知覚が真でなく、偽であると言っているのであろうか。しかしながら、

仮に視覚に限定しても、例えば「水中の棒が曲がって見えること」と「太陽を見ること」の二つは共に知覚とされ、偽とされるのであろうか。もしも水中の棒の例を「錯覚」として太陽を見る場合と区別するとしたら、「視覚の虚偽」は「全ての視覚が虚偽であること」を言っていないことになる。ある種の視覚は錯覚として虚偽であり、またある種の視覚はなんらかの理由で真理とされたり虚偽とされるのであろうか。そしてこのことを五官全体に拡張して考えたら、ことはより複雑になるだろう。かくして、ショーペンハウアー哲学において「錯覚」の記述と「夢のように虚しい」という記述を整理する場合、「視覚の虚偽」を「錯覚」と固定してしまっただけでは、考察を徒に複雑にする恐れがある。しかも、次のような疑問が残る。すなわち第二に、「錯覚」には多くの事例があるはずであり、それらを一括して考察できるのであろうか。例えば、「水中の棒が曲がって見えること」と「斜視してものが二重に見えること」は同じ錯覚であろうか<sup>4</sup>。

上記のことを考慮すると、素朴に「知覚の虚偽」である「錯覚」をショーペンハウアー哲学において問うならば、常に幾ばくかの曖昧さを避けられないように思える。その主な要因は、「知覚の虚偽」という概念を「錯覚」とする思考回路にあると考えられる。一旦この思考回路から抜け出して、ショーペンハウアーが「知覚」における「真理」と「虚偽」を問題とする場合の事例を検討する視点を確保する必要がある。

そこで小論では、夢 Traum、錯覚 Illusion、マヤー Maja、ファンタスマ Phantasmen<sup>5</sup>を「虚妄」と呼ぶ<sup>6</sup>。これにより、「錯覚」を「知覚の虚偽」とみなすことで通路が絶たれていた「夢」や「マヤー」や「ファンタスマ」と「錯覚」とを「虚妄」という観点で比較検討する途が拓けるであろうし、「錯覚」を「知覚の虚偽」として固定することを回避できるであろう。

ただし、虚妄という言葉は日常で広く用いられる。知覚のみならず、言語や思考にも使用される。虚妄は、知覚、言語、思考にまたがる問題である。これらへの考慮を欠いては、虚妄を十分に扱うことはできないであろう。とはいえ、小論で扱う虚妄は知覚に制限される。より厳密に言えば、「見る」と述語される「錯覚」、「夢」、「マヤー」が主に考察される。その限り、小論での考察は不完全なものであるとの諍りを免れられないだろう。だが、虚妄全般について論じることはここでの狙いではない。ショーペンハウアーの思想の内に「知覚の虚妄」の問題を論じるための資料が豊かにあることを指摘し、ショーペンハウアー研究における「知覚の虚妄」の問題を整理して、提起することが第一の目的である。結論を先取りすれば、ショーペンハウアー哲学には、カントに始まる感性の素材と形式という二つの観点に応じた虚妄があることを明らかにしたい。

## 1. 自己認識と虚妄

ショーペンハウアー研究として「知覚の虚妄」を考察する場合の関門は、彼の主著とされる『意志と表象としての世界 正編』（以後、主著と表記する）の解釈と関わるものであろう。

主著は全四巻から構成されている。「表象」については第一巻から考察されるが、その触り文句である「意志」については第二巻以降で説明される。そして山場として、第四巻の倫理学で「意志の肯定もしくは否定」が考察される。だが、これに至るには、世界の本質を私の意志であると見抜くこと、すなわち「自己認識」がなければならない。それゆえ「意志の肯定もしくは否定」の契機となる「自己認識」の吟味は避けて通れない問題となる。読者は、「意志の肯定や否定」の問題に到達する以前に、この自己認識そのものの困難にぶつかることになる。そもそも私たちが日常で自己認識できているならば、ショーペンハウアーが言う「意志」も素直に首肯できたはずである。だがそれをできずに議論を余儀なくされるのは、その著作の構成上の欠点をさておいても、「自己認識」そのものが私たちには困難にできているからだと考えられる。誇張して言えば、私たちが世界を認識するその都度、私たちの認識は欺かれ、虚妄と戯れているために、私たちはいつになっても「自己認識」に至れないと考えられる<sup>7</sup>。

ここで、主著の第一巻で考察される「表象としての世界」がもつ「虚妄」の問題が表面化する。問題は二つある。とはいえ、二つ目は一つ目から派生する問題である。

第一に、私たちの自己認識を阻害している要因が虚妄であるとして、それを主著のどの巻のうちに積極的に見出すのかという解釈の問題がある。虚妄の問題は、「欺く者」と「欺かれる者」との構図をとった時に先鋭化する。この図式の配役が「意志」と「知性」と指摘されるには、第二巻以降の、いわゆる形而上学的な考察をまたねばならない。これを否認することはできないが、意志と知性という名前を伏せたまま、「欺く者」と「欺かれる者」という構図を離れて、虚妄について語ることはできる。この限りで、第一巻の内部にもショーペンハウアー哲学における虚妄の問題を見出せるだろう。この立場は、第一巻の「表象としての世界」の考察のうちにすでに自己認識を阻害する虚妄を見出すものと言える。

こうして第一巻のうちに「虚妄」を見出す途が拓かれたとして、果たしてその虚妄はいかなる種類のものであろうか。表象としての世界に指摘される虚妄とは何か。これが第二の問題である。

表象が虚妄であることは、主著の第一巻ですでに記述されている<sup>8</sup>。しかしながら、表象が虚妄であることが述べられていると注目される箇所は大抵、第三節の時間の考察とそれ

に付随するヘラクレイトス、プラトン、スピノザ、インド人の太古の賢者を引きあいに出した箇所である<sup>9</sup>。これは、第一巻以外の諸巻との連関から注目された印象を拭いきれない。とりわけ第四巻において頻出する、表象としての世界を「個体化の原理」がみせる現象とする記述との連関で注目されているように思える。この事情を明白にするために、主著の第四巻と第一巻の類似箇所を比較してみる。

例えば、主著第四巻の第54節は「先の三巻が、表象としての世界のうちに意志に自身を映す鏡が明らかにされるということ、そしてその鏡のうちに意志は自身を明白さと完全さが増大する段階を認識し、〔中略〕ということが明白かつ確実な認識へと導いたであろうことを期待している」（WIS. 323.）という書き出しをもつ。従って、これまでの議論を前提として、一つの見解を示した箇所と言えよう。そこに「時間」の考察がある。それは、「とりわけ私たちは意志の現象の形式、従って生ないしは実在性の形式は、本当のところただ現在であり、未来でも過去でもない」（WIS. 327f.）という洞察から、「私たち自身の過去、さらには直前および昨日という日は、どうやら単に虚ろな空想の夢である」（WIS. 328.）といった帰結を導く。しかし「時間」についてはすでに第一巻の第3節に「過去も未来も（それらの内容の帰結を度外視すれば）とある夢としてかくも虚しいが、現在は過去と未来の間の延長も持続ももたない境界である。まさにそれゆえに私たちはまた、他のすべての根拠律の形態のうちに変わらぬ虚しさを再認識する」（WIS. 8.）という記述がある。

この異なる二つの巻の記述は、「時間」の考察を端緒として、虚しさや夢といった表現を導きだしている点で類似点をもつ<sup>10</sup>。これは、カント哲学における純粹感性の形式である「時間」を継承し、その絶えざる「継起」という特性に独自に着目したものである<sup>11</sup>。これに対して、両者は、第一巻「表象としての世界の第一考察」と第四巻「意志としての世界の第二考察」という異なる位相から述べられた「唯一の思想」（WIS. VII.）、特に「表象の虚妄」の考察であると見当をつけられる。とりわけ第54節は、先の三巻を経て読者に伝えられた思想を前提としていたから、第一巻では使えなかった「意志」を交えた考察がなされている。ひいては第一巻ではまだ「意志」が説明されていないという点で、第一巻における虚妄の考察は副次的にさえなりうる。

しかし、上記のような第四巻から遡及的に見出される虚妄の問題は、不十分ではないだろうか。これとは逆に、第一巻を出発点とした虚妄の問題があってもいいのではないだろうか。仮に第一巻が「表象としての世界の考察」に制限されるとしても、そこには思考の誤謬という哲学史において伝統的な虚妄の考察がある<sup>12</sup>。第一巻という「表象としての世界の考察」から見えてくる虚妄の問題があるのではないだろうか。

以後、主著第一巻におけるショーペンハウアーの「虚妄」の考察が、「思考の虚妄」のみならず、「知覚の虚妄」をもつこと、しかも後者は、単なる哲学の教科書的な考察から

一歩進んで、独自の「視覚と色彩について」の研究の成果を反映していることを提起することで、主著第一巻における虚妄の問題の考察を試みたい。

## 2. ショーペンハウアーによる「虚妄の考察」の生成過程（1）

主著の第一巻における「知覚の虚妄」を解明するに先立ち、ショーペンハウアーがその思索の展開において「虚妄」をどう理解して考察を深めていったかを推測する。これは、残された資料を年代順に構成することによりなされる。ただし、テキストから作者自身の思考過程を完全に跡づけるつもりはない。とはいえ、ショーペンハウアーが自身の作品として発表した思想を結節点として、その間を遺稿によって埋めることはできる。それにより、彼が関心をもった問題がどの時期に顕著に記述されているかは指摘できるだろう。

1803年から翌年にかけての旅行や1807年の商人修行から学問への転向にショーペンハウアー哲学の萌芽を認めることもできるだろうが、ここでは1810年にショーペンハウアーが正式に哲学科に転向した後の資料から、1819年の主著刊行までの資料を用いる。

先に概観すれば、彼は最初は「虚妄」について形而上学の問題として考察した記録を残している。また近代以降の認識論で主要な問題とされる思考の誤謬の考察は、1813年の学位論文に確認できる。ところが、1814年頃に知覚の虚妄についての考察が加わる。この成果は1816年の『視覚と色彩について』に反映されている。そして1819年の主著に至り、その第一巻において虚妄の考察が「知覚」と「思考」の二つの観点から考察される。

さて、ショーペンハウアーは、西洋哲学のなかで特にカントとプラトンの影響を受けたことを幾つかの箇所で告白しているが、1810年の頃はまだプラトンへの関心がカントよりも強かったようである。これはプラトンが形而上学について語っているのに対して、カントは従来の形而上学の破壊者であること、そしてカント自身の形而上学という側面にショーペンハウアーが当時まだ注目していなかったことに起因するようである<sup>13</sup>。このことから、1810年前後のショーペンハウアーの関心はカント以前の形而上学に傾いていたと考えられる。1811年のメモに次のようなものがある。

私たちは目覚めた。そして再び目覚めるであろう。人生はひとつの夜であり、それは夢で満たされている。その夢はしばしば悪夢になる。(HNI S. 16.)

ここで記されている「夢」は、目覚めたものにとっての単なる虚妄であるだけでなく、悪夢という負のイメージが付随したものである。夢の考察は、1811年に残されたメモから予測する限り、認識論というよりは形而上学よりであったことが分かる。プラトンの『パイドン』における、イデア論の基礎となる「目に見えるもの」と「目に見えないもの」の考察、ないしは『国家』第六巻における「洞窟の比喩」を連想してもよいであろう<sup>14</sup>。つまり、ショーペンハウアーがプラトンを読むことで培っていたのは、私たちの日常の世界が悪夢のように虚妄や悪に満ちていることへの驚嘆と、そこから欲求される善美なる世界、プラトンの「善」に象徴される真の実在の世界への憧憬と思われる<sup>15</sup>。これが夢の考察にも反映したのであろう。

虚妄と真実、悪夢と真の実在の世界という形而上学的な発想に加えて、ショーペンハウアーはカントの『純粋理性批判』における超越論的観念性と経験的実在性の教説に触れることで、夢に対する別の視点をもつに至る。それで「夢」の考察は、いわば形而上学と認識論の二つの極をもつことになる<sup>16</sup>。例えば、1813年のメモには、カントの『純粋理性批判』の第二版の242頁を土台とした、夢の考察がある<sup>17</sup>。また同じ1813年の学位論文の第24節「生成の根拠律に関するカントの証明に対する反駁、ならびに同じ意図をもって書かれた証明の呈示」には、先述のメモとほぼ同文の考察がある。そこでは「それゆえ、夢を見ている間はファンタスマも実在的客観だと思われる。そして、夢から覚めて初めて、すなわち、直接の客観が意識に再び現われて初めて、それは誤り Irrthum だったと分かる。たとえ夢は夢で因果律が維持されていたにしても、である。」(Go S. 35.)とある。ここで目をひくのは、夢は覚醒時からみたら誤りかもしれないが、夢には夢で因果律に基づく必然性が認められている点である。夢と覚醒時の真偽の問題が公平に問われており、悪夢のような夢の考察はなされていない。

こうしたカントの影響を受けた認識論的な夢の考察が確認できる 1813年の学位論文には、もう一つ注目すべき点がある。そこには、夢よりも端的な「虚妄」に対する考察がある。

学位論文という認識論の領域のなかで、ショーペンハウアーは初めて「アリストテレスの錯覚 Illusion」に言及する<sup>18</sup>。ただし、1813年の学位論文においては、主題としてではなく、因果律を考察する一例として副次的に取り上げられていることは注意を要する。まさにこの点が、早くも1814年に変更とまでは言えなくとも、変容するからである。

だが、1814年のメモの考察に移る前に、「アリストテレスの錯覚」について説明しておこう。もちろん、この名称はアリストテレス本人の命名ではないが、今日の心理学でも知られているようである。ショーペンハウアー本人が参照を促しているのはアリストテレスの『形而上学』の次の箇所である<sup>19</sup>。

たとえば、指を交錯させてそこで或る一つのものに触れると、触覚はこのものを二つであると告げるが、視覚はこのものを一つであると告げるからである<sup>20</sup>。

これを小論では、「複視」もしくは「二重の触覚」という錯覚の問題と理解する。そしてこの問題を、ショーペンハウアーは 1813 年の学位論文で、誤謬推理の問題としてこう解決している。

二つの球面が中指と人差し指の外側に同時に作用している場合、その球面は一つの球のものではありえない。いま、二つの球面が中指と人差し指の外側に同時に作用している。従って、二つの球が存在する。この大前提では、指が自然な位置にあることが前提されているが、指を重ねてその自然な位置を変えると、それだけで推理を虚偽 falsch にする。(Go S. 37.)

このように、1813 年の学位論文では、思考の推理を乱すものとして「アリストテレスの錯覚」が引用されていたのであるが、早くも 1814 年のメモ「私の根拠律についての論文の 56 頁への補足」では、思考とは別の、知覚そのものの虚妄としての「アリストテレスの錯覚」、つまりは複視の考察がなされている。そしてここでなされた「仮象」と「実在性」の区別は、1847 年の学位論文第二版の第 21 節に転載され、一般にショーペンハウアー哲学の「実在性」と「真理」を端的に示したものとして知られることになる<sup>21</sup>。

### 3. ショーペンハウアーによる「虚妄の考察」の生成過程（2）

話を戻して、ショーペンハウアーによる「アリストテレスの錯覚」の考察の変容をつぶさにみていこう。確認すれば、1813 年の学位論文という認識論において、実在性の問題として「夢」が、そして推理の虚妄の問題として「錯覚 Illusion」である「複視」が考察されていた。しかしながら、夢と錯覚の差は縮まる。それどころか、見方によっては両者は重なる。それは、因果律の考察の一例としてのアリストテレスの錯覚から知覚の虚妄の具体例としてのアリストテレスの錯覚の考察への移行がなされた時点で生じる。



1814年のメモにはまだ「範疇」というカント用語の借用が認められるが、これは1819年の主著の序文では著者が自ら反省している点である<sup>22</sup>。しかしこのことから如実に、学位論文を発表後も持続的に、ショーペンハウアーがカント哲学を受け入れつつ、自身の研究に取り組んでいたことが窺われる。このカント哲学では確認できない独自の問題意識の一つとして「複視」の問題が考えられる<sup>23</sup>。

斜視して見ると、あらゆるものが二重に見えるといった事態が、否応なく起こるものである。単にたまたまではなくて、常に全ての対象は二つの眼においてそれぞれ一つの像を投射するのだから、二つの像が映る。しかし私たちの視覚も触覚も直観である。すなわち悟性に介助されて生じる。それで私たちの視覚は単なる感覚器官の感覚ではない。私たちは左右それぞれの眼で各々ひとつの像を捕えているにもかかわらず、ただ一つの対象を見ている。これは、直観は感覚においてではなくて、感覚への範疇の適用において生じるからである。因果性の範疇を媒介するというこの点で、私たちは直接的な客観の興奮からその間接的な原因へと移行している。さて、私たちは経験から、ある物体の光点から右目へ差し込む光線と左目へ差し込む光線が作り出す角度を知っている。全ての光線は、私たちの知るところによれば、この角度において両目に当たるのだが、それは同一の光点からきている。従って、私たちは両眼で見ているにもかかわらず、ただ一つのものを見る。しかし私たちが両眼を、その生来の慣れ親しんだ位置から動かすと、つまり斜視すると、確かに悟性はいままでと同様に、運転するのだが、悟性は紛れもない偽りの所与 *lauter falsche data* を授かっており、それから同一の点から発している光線は今や両眼と通常とは全く異なる角度をなす。それゆえ、いまや私たちは全てを二重に見る。[中略] 同時に私たちはここで悟性と理性の区別の明確な観点を獲得する。すなわち、かの錯覚 *jene Illusion* は、理性にとっては除去できるが、悟性にとっては粉碎できない。悟性は悟性である限り非理性的である。その訳は、そのような錯覚の場合、抽象的には（従って理性にとっては）ただ一つの客観がそこにあることをよく知っている。もちろん私たちは交差した指や斜視では二つのものに触れて、二つのものを見るのではあるが。とはいえ、錯覚そのものはこうした認識にもかかわらず常に不動にあり続ける。それは悟性と感性は理性の法則にとっては干渉できない、つまりまさに非理性的だからである。もっとも人が眼をいつも斜視にしていたら、悟性はその覚知を修正しようと試み、触覚や視覚の異なる仕方での知覚の間に一致をもたらす。だからその人は、自身が子供の時したように、新たに運動し、一つの点から発する光線が両眼に対して（厳密には、いまは両眼の新たな位置で相互に）分岐する角度を学ぶことができる。だから、常習的に斜視であったならば、すべては一つのものに見える。しかし日々、

異なる角度で斜視であった者は、一切を常に二重に見るであろう。(HNI S. 193f.)

上の引用文から次の二点を指摘したい。第一に、文面から明らかに、ショーペンハウアーは「アリストテレスの錯覚」を、「知覚の誤り」として真っ向から考察している。これは具体的に複視と二重触覚の問題として理解され、光学や医学の知見を背景にして、それをカント哲学の用語で説明することが試みられている。そしてその過程で、すでに1813年で確立していた彼独自の悟性と理性の説明の確信を深めている。第二に、複視は眼の位置をずらし、斜視するたびに回避できずに生じるものであるが、常に一定の斜視の状態にあれば、悟性が学習することで複視という錯覚は消失し、通常の一つの対象が現われることが指摘されている。この二点目には、単なる錯覚の生成消滅を超えることが述べられているように思える。引用文を解釈すれば、次のようになるだろう。

ショーペンハウアーによれば、私たちの知覚は悟性によって構成される知性的な直観である。この悟性が作り出す表象としての世界の確実性は、第一に悟性による因果律の適用の確実性にかかっている。これに関しては、因果性は意識に備わるアプリアリな形式の一つであるとされることで解決される。そして理性による思考の不確かさと比べて、悟性による認識の確実さが強調される。しかしながら、複視という錯覚の考察により、知覚の虚妄が生じる。これに対してショーペンハウアーは、悟性の形式である因果性そのものは虚妄ではなく、それを適用する素材が「偽りの所与」であるがゆえに虚妄を生むとする。これにより、悟性能力への信頼を守る。しかしながら、このように悟性操作の確実さを強調することにより、複視の問題は別の観点から表象としての世界の虚無性、脆さを露呈する。感覚の所与に頼らなくてもよい幾何学や数学における純粹直観とは異なり、私たちの知覚は感覚の所与に頼らざるをえない。知覚は経験的な直観とならざるをえない。そして、感覚の所与が狂うことを複視は告発している。感覚の異常に伴う知覚の虚妄は、いくら悟性操作が確実であろうと発生する。むしろ、悟性操作が確実であるがゆえに回避できない。

虚妄は、それが虚妄と理解されている限りで、すでに真なるものではないと看破されている。その意味で、虚妄は語られた時点で話者からは拒絶されている。とはいえ、知覚の虚妄である錯覚は、「非理性的な」悟性の産物であるがゆえに、頭でいくら理解していても振り払えない。この点で錯覚は、理性的に正しく考えれば解決される迷信や誤謬よりも厄介である。もっとも、複視に関しては、悟性が学習することで正常に戻ることが指摘されていた。だが、すぐにそれに続けてこう言われていた。「しかし日々、異なる角度で斜視であった者は、一切を常に二重に見るであろう。」こうした仮定を考えると、ショーペンハウアーの表象としての世界に対する不信感や不安を読み取ることは行き過ぎであろうか。しかしながら、感覚器官の位置をずらすだけで錯覚が生じることは、不安定で夢のような世界と「感覚」や「感性の所与」の不確かさの点で部分的に共通する。

#### 4. ショーペンハウアーによる「虚妄の考察」の生成過程（3）

1813年の学位論文において、夢が虚妄であることはひとえに睡眠時に現われる表象がファンタスマであり、それはかつて一度は体験したものとはいえ、もはや直接に身体において感覚の所与を伴っていないこと、つまり「感覚の所与の不在」にもかかわらず、構想力により再生されたものであることから導かれていた<sup>24</sup>。一方、複視という錯覚は「感覚の所与の狂い Verrücken」をその起源としていた。

夢において見られる表象はその時の感覚の所与から作られたものではない。かつて体験された感覚が再生されたものである。たとえ完全な再生であったとしても、それはもうかつての感覚ではない。少なくとも時間軸上の差異があり、変容がある。これは、複視が「感覚の所与の狂い」から生じていたことと変わらないのではないか。夢における表象も錯覚における表象も、共にいつもと異なった感覚の所与に対して、認識能力が働くことから生じたものではないか。そうならば、「感覚の所与」を鍵とすることで夢と錯覚の間に共通項を見出せる。両者はふだん慣れ親しんでいる感覚の所与とは異なる、変容した所与から生じたものである。

ただし、両者の間には依然として差異も残されている。厳密に言えば、所与に対して働く認識能力が夢と錯覚では異なる。すなわち、夢においては構想力が、覚醒時の錯覚においては悟性が働いている。また、夢の場合は本人がこれは夢であると分かっている点で、そこには虚妄があるものの見抜かれている。これは夢は覚醒時からしか語れないという構造から生じる。寝ている時に虚妄と気づけなくても、目覚めればそれを虚妄と認めざるをえない。これに反して錯覚の場合は、必ずしもそれが錯覚であると見抜かれている必要はないように思える。極端な話、錯覚を知覚の虚偽とみなすことすらも、問題がある。例えば、斜視によりものが二重に見えることは当然である。仮に多くの人が斜視である社会があったとしたら、そこでは複視は錯覚と呼ばれるであろうか。むしろ一つの物しか見えないことが錯覚にすらなりうるのではないだろうか<sup>25</sup>。こうした知覚する者が多数か少数かという判断基準は、論理的とは言い難い。従って、錯覚については、夢のように睡眠と覚醒という明白な基準が見出しにくいと言わざるをえない。まさにこれが、錯覚を単純に知覚の虚偽と断言する際の難点となる。ショーペンハウアーによれば、複視という錯覚の起源は「感覚の所与の狂い」であるが、所与が狂う前後のどちらを真とするかは、容易に判定できない。そして仮に判定できたとしても、「偽りの所与」の問題は、一方が正常で真

とされ、もう一方が相対的に異常で偽とされることで尽きるのであろうか。錯覚と知覚の虚偽の問題の根は深そうである。ともあれ、こうした見抜きの有無に固執すれば、夢と錯覚は虚妄としては異なるものであり続ける。

上記の問題点はあるものの、1814年のメモにある「アリストテレスの錯覚」を手掛かりとすることで、夢と錯覚の間に通路が得られる。「感覚の所与」の変容が両者の虚妄の鍵であった。しかし、先に指摘したショーペンハウアーの思想形成における夢の二重性は、まだ完全には解消できない。確かに、ショーペンハウアーはプラトンとカントという二大教説の類似点に気づき、それを調停したと主著で述べている<sup>26</sup>。学位論文を出発点とする認識論的な考察においては、夢と錯覚が虚妄としてひとつのまとまりをもつ視点をとりあえず指摘できた。だが、「偽りの所与」に基づく考察から一歩進んで、所与という不確実な要素に左右される表象としての世界にショーペンハウアーが不安を感じたことまでは言えたとしても、その表象としての世界が悪夢のような虚妄であるとまで言うことには慎重にならざるをえない。

そうではあるが、夢の二重性が、ショーペンハウアー哲学における虚妄の問題の多重性に対応していることは指摘できる。表象としての世界を悪夢とするのは、感性の「所与」というよりは、「形式」である<sup>27</sup>。先に確認したように、感性の形式の相対性から、それをもとに現われる表象としての世界の虚無性が論じられていた。そしてこの虚無が「なにか夢のような」(WI S. 8.)と修飾されていた。それゆえ、夢と関連して考えられるのは、第一に感性の形式である。これに加えて、新たにアリストテレスの錯覚に注目することにより、感性の素材である「感覚の所与」からも、夢のような虚妄が生じることを確認した。形式と素材という異なる起源をもつ虚妄が、夢の二重性にも対応していると考えられる。つまり、形式から導かれる虚妄は悪夢と結びつき、素材から導かれる虚妄は一般的な夢と結びつく。虚妄の問題は、カント以来の形式と素材(所与)の区分に対応して、異なる面をもつようである。

最後に、1814年のメモ以降の、ショーペンハウアーの虚妄の考察の経過を概観しておく。先に引用した1814年のメモは、若干の変更点はあるものの、1816年の『視覚と色彩について』の第一章「視覚について」に記述される。ここにおいて、1814年に学位論文の補足とされていた諸考察が、1814年に開始される色彩研究の影響を受けたものであったことが推測される。さらに言えば、複視という視覚の異常の考察が、哲学に留まらず、当時の医学や光学の知見を基礎としてなされていたことの説明がつく。ショーペンハウアーは、カント哲学を咀嚼しながら、光学や解剖学における視覚についての研究を、カント哲学の術語を用いて説明しようと試みることで、独自の問題意識を錬成していたと思われる<sup>28</sup>。

## 5. 『意志と表象としての世界』第一巻における「知覚の虚妄」について

1813年の学位論文に確認される「アリストテレスの錯覚」が、1814年の遺稿「学位論文の56頁への補足」を経て、1816年の『視覚と色彩について』の第一章「視覚について」のなかで「知覚の虚妄」の考察の一例として一応の完成をみていたことを確認した。この考察は1819年の主著の第一巻のうちにも組み入れられている。

主著の第四巻の虚妄の記述から遡及的に第一巻を考慮した場合、表象としての世界の虚無性の考察があったが、それは感性の形式の一つである時間の考察を契機としていた。しかし第一巻から虚妄について考察する場合、それとは別に知覚や思考の虚妄の記述が考えられる。とりわけ、知覚の虚妄である錯覚（複視や二重触覚）は、感性の形式ではなくて素材である「偽りの所与」から生じたものであった<sup>29</sup>。これは、主著第一巻ではどう語られているか。

第一巻で明示的に複視について言及されているのは、第4節と第6節の二箇所である<sup>30</sup>。そこでは、ショーペンハウアー本人が『視覚と色彩について』の参照を促していることから察せられるように、複視についてはごく簡単な説明しかない。特に、1859年の主著の第三版では、『視覚と色彩について』に加えて学位論文第二版（1847年）への参照が加わっているため、主著第一巻における知覚の虚妄が遠景になった観がある<sup>31</sup>。とはいえ、一貫して複視の記述があることに変わりはない。そうならば、主著第一巻における複視への言及の意義は何であろうか。

まず思い浮かぶのは、「知覚の虚妄」の考察が「あらゆる直観は単に感覚的であるのではなく知性的である」（WIS. 15.）という主張の「裏書き」や「検証」をしているということである<sup>32</sup>。しかし、これは消極的な説明である。表象としての世界の基礎を示した1813年の学位論文において、知覚の虚妄の考察がただ副次的な観点から言及されていたことから傍証されるように、彼の「表象としての世界」が表象する者の知性の産物であることは、虚妄の考察をまたずして説明できるのである。

私たちはすでに、ショーペンハウアーが虚妄を感性の形式に加えて、その素材である所与からも考察していることを知っている。しかし私たちは、知覚の虚妄の考察から、恐ろしい悪夢のような世界の考察へと移行することには慎重にならざるをえなかった。だから、悪夢のような世界観の根底に知覚の虚妄を安易に置くことはできない。では、知覚の虚妄の積極的な意義は何であろうか。もっとも、感覚的所与における虚偽を主著第一巻のうち

に指摘したことにも幾許かの意義はあろう。そこからさらに進んで、以下の二つを提案してみる。

第一に、知覚の虚妄はショーペンハウアー哲学における「夢」を考察する補助となる。知覚の虚妄は、形式と素材の二つの源泉をもっていた。この区分に対応して、ショーペンハウアーの夢の考察の二重性が解釈できることは先述した通りである。

第二に、知覚の虚妄は、知覚が習得されるものであることを示す。「常習的に斜視であったならば、すべては一つのものに見える」(HNI S. 194.)とあることや、「感覚が引き渡す所与」(WI S. 14.)から直観を作り出すには「さまざまな感覚によって同一の対象から獲得した印象を比較する」(ibid.)という学習が必要であるという主張から、知覚は主体が知覚するその都度、更新されると考えられる。この絶えざる更新という学習により、知覚は安定し、より機敏かつ繊細になりうる<sup>33</sup>。逆に、「日々、異なる角度で斜視であった者は、一切を常に二重に見るであろう」(HNI S. 194.)という記述は、身体の損傷や変形によって習熟した知覚が虚偽で不安定なものになることを示している。しかも、偽りの所与と関わり続けた場合、知覚は通常とは異なる錯覚へと更新されることになる。ショーペンハウアーの知覚論は、更新という観点からは、虚妄にも精密にもなるという知覚の習得の重要性を喚起するのではないか。

## 6. ショーペンハウアー哲学における「虚妄」の暫定的な整理

これまでの考察を受けて、「虚妄」という言葉の整理をしておく。ただし、ショーペンハウアーによる虚妄の考察は「思考の虚妄」を押さえて初めて全体像が得られる。今回は思考の領域については扱いきれなかったので、ショーペンハウアー哲学における「虚妄」の暫定的な整理に留まらざるをえない。

さて、私たちが触れて眼にする世界は、私たちの知性である悟性が構成する表象としての世界である。この世界における行住坐臥は、大きく睡眠と覚醒に大別される。とりわけ、睡眠時の表象は夢の形象、「ファンタスマ」とされ覚醒時の表象と区別される。しかしショーペンハウアーによれば、私たちの人生は「夢」のように虚妄であり、欺きに満ちている。だから、表象としての世界はバラモン教の「マーヤー」とも呼ばれている。それで、覚醒時はまとまりをもった「長い夢」(WI S. 19.)であり、睡眠時は「短い夢」(ibid.)

とされ、ともに「夢」とされてしまう。その説明は、概して知性の形式の相対性に求められてきた。しかし、覚醒時の「錯覚」に眼を転じれば、それは「偽りの所与」から生じると説明されており、感性的所与の変容という点で、夢の形象と共通していた。よって、形式のほかに素材（所与）からも、表象としての世界の虚妄は説明される。

## 結語

主著第一巻を出発点として、虚妄の考察を試みた。それは、1819年の主著刊行までのショーペンハウアーによる虚妄の考察を追跡することからなされた。そこには、彼の「アリストテレスの錯覚」に対する考察の発展があった。特に「複視」という錯覚の考察には1814年をおおまかな境とした重心の変化があった。つまり、アリストテレスの錯覚は因果律の一考察から、視覚の問題へと移行していた。この視覚論のなかで「偽りの所与」が言及されていた。ここにおいて、ショーペンハウアー哲学の内部で、時間という純粹感性的形式の虚無のほかに、素材である所与から生じる虚妄の問題が成立したと考えられる。後者は『視覚と色彩について』を経由して主著第一巻に記述されていた。その結果、主著第一巻には、感性的形式と素材の二つの観点からなされる直観の虚妄と思考の虚妄の計三つの虚妄が考察されていることになる。ただし小論では、知覚の虚妄を提示するという制限から、思考の虚妄の問題については示唆しただけである。

以上の考察により、主著第一巻に感性的所与の虚妄の問題があることを指摘した。これを含めた上述の三つの観点から、ショーペンハウアーの虚妄の問題を考察すれば、主著第一巻に新たな解釈の途が拓かれると思われる。

---

## 【凡例】

ショーペンハウアーのテキストはヒュプシャー版を用いた。引用に際しては、刊行されている諸訳に多くを学んだが、小論の著者の訳文に続けて、下記の略号で示されるテキスト

---

とそのページ数を記した。

Werke : Arthur Schopenhauer. *Sämtliche Werke*, 4.Aufl., 7 Bände., Mannheim, F. A. Brockhaus, 1988.

Go : *Ueber die vierfache Wurzel des Satzes vom zureichenden Grunde*, 1. Ausgabe(1813), in : Werke VII.

G : *Ueber die vierfache Wurzel des Satzes vom zureichenden Grunde*, 2. Ausgabe(1847), in : Werke I.

F : *Ueber das Sehen und Farben*, in : Werke I.

WI : *Die Welt als Wille und Vorstellung* (1818/1819), Band 1, in : Werke II.

WI I : *Die Welt als Wille und Vorstellung*, Band 2, in : Werke III.

HNI-V : Arthur Schopenhauer. *Der Handschriftliche Nachlaß*. Hrsg. V. Arthur Hübscher. 5 Bände W. Kramer, Frankfurt am Main, 1966-1975.

## 【注】

<sup>1</sup> 例えば、『岩波哲学小辞典』の「誤謬」の項目には「1) 虚偽に同じ。2) 真でないことを真とみなすこと。厳密でない言い方では真でないことと同意味に用いられることもある。これは知覚上の誤謬（錯覚、観測上の誤差などをも含めて）と思考上の誤謬とに分けることができる。」とある。Cf. 『岩波哲学小辞典』岩波書店、1979年。

<sup>2</sup> 古典として、プラトンの『テアイテトス』がある。また、アリストテレスの『形而上学』第四巻第五章にこの問題の概観がある。特に、そこで論じられている錯覚の問題について Kenny が論考を出している。Cf. Kenny, A. The Argument from Illusion in Aristotle's *Metaphysics*, 1009-10. *Mind* 76 (1967) pp. 184-197.

<sup>3</sup> J.L.オースティンの『センスとセンシビリア』における考察を下敷きとした。Cf. J. L. Austin, *Sense and Sensibilia*, Oxford University Press, London, 1962.

<sup>4</sup> オースティンは「複視」を「極めて例外的な事例」と言っている。Austin(1962, pp.90-91.)

<sup>5</sup> ショーペンハウアー哲学におけるファンタスマ *Phantasmen* については、若干の説明を要するであろう。1813年の学位論文第22節によれば、一度身体を媒介して主観に現在した表象を、身体を媒介することなく意のままに再現する能力を構想力と呼び、構想力により再現された表象をファンタスマと呼んでいる。また同書同節ならびに第24節では、夢をファンタスマと呼んでいる。

ただし、ショーペンハウアー哲学における夢やファンタスマの考察は難問である。Fischerはショーペンハウアーの夢の教説は重要な問題であり、「深く極められた研究が求められる」と述べている。それゆえ、ファンタスマを虚妄に加えてはいるが、夢における形象 *Traumbild* として理解されたい。Vgl. Kuno Fischer, *Schopenhauers Leben, Werke und Lehre*. Dritte Auflage, Carl Winter's Universitätsbuchhandlung, Heidelberg, 1908, S. 212.

<sup>6</sup> 「虚妄」は仏教において使用されてきた伝統もあるが、ここでは田中美知太郎の用法に則りたい。田中は「虚偽とか虚妄とかいうものの存在を認識の領域だけに限り、判断論の問題として処理しようとするのが近代認識論の一般的傾向のように見うけられるけれども、プラトンはそれを快苦の領域にも認めようとするわけである。われわれは真偽の区別は知識には存在せず、ただドクサ（思いなし）の領域だけにあるとしたのであるが、虚偽は判断や認識の形式的条件だけできめられるのではなくて、いわゆる *falistas materialis* の存在



---

は感覚的所与のうちにも見出されるのであり、錯覚の存在は虚妄が感覚の領域にも及ぶものであることを示している」と述べている。これを、西洋哲学における虚偽の問題について「虚妄」という言葉を用いる先例としたい。Cf. 田中美知太郎『プラトン IV』岩波書店、1984年、351頁。

<sup>7</sup> この種の考察は『意志と表象としての世界 続編』の第46章「生の虚無性と苦悩について」に顕著に確認できる。Spierling は『ショーペンハウアー小辞典』の「欺きと幻滅」の項目で、同書の同章を指して、ショーペンハウアーのペシミズムを理解するよい導入になると言っている。Vgl. Volker Spierling, *kleines Schopenhauer Lexikon*, Reclam, Stuttgart, 2003.

<sup>8</sup> Roswitha は第一巻ですでに生存の虚無性が語られていると解釈している。Vgl. Roswitha Dörendahl, Über die Bedeutung der Langeweile in Schopenhauers erstem Band der Welt als Wille und Vorstellung, *Schopenhauer-Jahrbuch* 82 (2001), S. 16.

<sup>9</sup> WIS. 8f.

<sup>10</sup> ショーペンハウアーが自覚的に「時間」の考察を自身の哲学の端緒としていたことは、彼の方法として指摘できるであろう。例えば彼は、「どのようにして意志のあらゆる客観が虚無であることを個体に根ざす知性に告げ知らせ、理解させているかという方法は、まず第一に時間である。」(WII S. 658.) と言っている。これと併せて、1813年の学位論文における「根拠の四つの類を系統だった順序で並べるなら、最初に存在の根拠律がこなければならず、さらにそのなかで初めに来なければならないのは、時間に対しての適用である。時間とは、本質的なものだけを含んだ、充足根拠律の残りの形態すべてにとっての単純な図式、それどころか、あらゆる有限性の原型なのである。」(Go S. 86f.) という言葉を連想する人もいるであろう。

<sup>11</sup> WIS. 13.

<sup>12</sup> ショーペンハウアー自身、プラトンの『テアイテトス』とカントの『純粋理性批判』における誤謬の考察を検証している。Vgl. WIS. 94.

<sup>13</sup> ザフランスキーは以下のように考察している。

アルツール・ショーペンハウアーは、ゲッティンゲン時代にカントを読み始めているが、当時はまだ形而上学の約束に期待を抱いていたこともあって、ケーニヒスベルクの哲学者を形而上学の破壊者とみなしていた。1810年のショーペンハウアーの欄外のメモにはこんな箇所がある。「ある男が嘘を言う。本当のことを知っている別の男が、それは嘘偽りであって、本当なのはこれだ、と言う。本当のことは知らないが極めて明敏な第三の男が、嘘に含まれている矛盾の数々とそんな主張の不可能なことを指摘して、こう言う、それゆえにこれは嘘偽りであると。この人生は虚偽であり、カントただ一人が明敏な男である。本当のことを言ってくれる人はたくさんいる、例えばプラトン。」(HNI S. 13.) と。

しかしカントは明らかに、ただ単に禁令を掲げるだけでなく、それ以上のことをしてきた。ただ単に理性の規制された行動を監視し、越権を阻み、ないしはそれを暴露しただけでなく、それ以上のことをしてきた。そしてこの〈それ以上〉が同時代の人々の心に火をつけたのであった。ただアルツール・ショーペンハウアーは、当時はもっぱらプラトンに沈潜していて、それにはいまだ気付いていなかった、ないしは気付こうとはしなかった。

---

Cf. リュディガー・ザフランスキー、山本尤訳『ショーペンハウアー——哲学の荒れ狂った時代の一つの伝記——』法政大学出版局、1990年、188頁。

<sup>14</sup> 『パイドン』も『国家』も研究ノートが残されている。Vgl. HNII S. 372f.

<sup>15</sup> ショーペンハウアーは1813年（HNI S. 41.）に次のように書き留めている。

しかし、この世界が偶然、誤謬、痴愚の王国であり、暗愚が賢慮を完全に打ち負かしているということはどれほど私たちを驚嘆させることか。[中略] この結果、天へと召される死は、剥離である。（木から熟れた実が落ちるように、そしてそれゆえに、プラトンは『パイドン』で賢者の生涯は一つの長い死である、すなわちこのような世界からの引きちぎり、と言ったのではないか）。

<sup>16</sup> ショーペンハウアーがプラトンとカントの調停に成功したのは、アトウェルによれば1814年以降とされる。この場合、典拠とされるのは次のメモ（HNI S. 131.）である。

感知される事物ではなくて、ただのイデー、永遠の形相、現実に存在するものを説くプラトンの教説は、時間と空間は物自体に帰属せず、私が直観する単なる形式であると説くカントの教説のもう一つの表現でしかない。

1814年以前の1813年の学位論文にもカントとプラトンの一つの調停を認めることはできるであろうが、いずれにせよ、ショーペンハウアーがこの時期にカントとプラトンの教説を研究することで、自身の思想に二つの極をもっていたことは間違いない。この一例として「夢」の考察の二重性が考えられる。Cf. John E. Atwell, *Schopenhauer on the Character of the World The Metaphysics of Will*, University of California Press, London, 1995, p. 77.

<sup>17</sup> HNI S. 62.

<sup>18</sup> Go S. 37.

ちなみに「アリストテレスの錯覚」は、デカルトが『人間論』で、メルロー・ポンティが『知覚の現象学』で考察している。

<sup>19</sup> ヒュプシャー版では、形而上学の第三巻第6章とされているが、正しくは第四巻の第6章である。

<sup>20</sup> 出隆訳『アリストテレス全集 12』岩波書店、1968年、124頁。なお、出の註によれば、「アリストテレスの錯覚」は『夢について』、『問題集』にも例示されている。

<sup>21</sup> Spierling (2003) は、「重要な認識論を扱った学位論文の第21節において「実在性」と「真理」の概念が簡潔かつ明瞭に記されている。」と言っている。

<sup>22</sup> WIS. X.

<sup>23</sup> カントの『人間学』に「感覚の仮象 *Sinnenschein, species, apparentia*」の考察があることは看過できない。1811年から1818年までのショーペンハウアーの研究ノート（HNII S. 298.）には、カントの『人間学』（1798年）への書き込みが掲載されているが、残念ながら「感覚の仮象」についてのメモは見当たらなかった。とはいえ、1811年から1818年の間にカントの『人間学』をショーペンハウアーが読んでいたことは、彼が虚妄について考察する一つの源泉になったと考えられる。また、カントの『論理学』の緒論に虚偽についての考察がある。『論理学』については学位論文（Go S. 13.）に言及箇所があるため、これも考量

---

してよいであろう。ただし、決定的な典拠は現時点では判然としない。

<sup>24</sup> Go § 22.

<sup>25</sup> この種の議論はすでにアリストテレスが言及している。Cf. 『形而上学』(1009b)

<sup>26</sup> WI § 31.

<sup>27</sup> 形式と素材の説明としては、カントの『純粹理性批判』(A 19 / B 33)の説明を参照されたい。

<sup>28</sup> 『視覚と色彩について』の哲学的な意義については、下記の小論を参照されたい。Cf. 鳥越覚生「ショーペンハウアーの色彩論から構成される構想力の問題についての若干の考察と見通し」、『宗教学研究室紀要』第9号、2012年、107-127頁。

<sup>29</sup> 1814年のメモ、1816年の『視覚と色彩について』、1820年の講義録、1854年の『視覚と色彩について』第二版には、「偽りの所与」という記述がある。これより、この表現がショーペンハウアーによって一定の了解を得ていたことが窺われる。しかし、主著には「偽りの所与」という記述はなく、代わりに「偽りの原因」(WIS. 29.)や「偽りの仮象」(ibid.)とされている。

<sup>30</sup> 1819年の『意志と表象としての世界』には、節による区分はないが、便宜上、第二版以降に付された節番号を表記する。

<sup>31</sup> 主著第一版の16頁では、斜視における複視が言及されているが、その詳しい説明については1816年の『視覚と色彩について』を参照するように述べられている。ところが、1859年の第三版では、1847年の学位論文第二版の第21節への参照が補足されている。

<sup>32</sup> 複視の記述の意義を主題とした研究は、管見の限り見つからなかった。しかし、ザンボニーニがそれに言及していた。また、西尾幹二による『意志と表象としての世界』の翻訳は、感官の欺きがショーペンハウアーの悟性論を裏書きしていることを汲んだ結果と思われる。Vgl. Ferruccio Zambonini, Schopenhauer und die moderne Naturwissenschaft, *Schopenhauer-Jahrbuch* 22 (1935), S.53. 『世界の名著 続10』西尾幹二責任編集、中央公論社、1975年、143頁。

<sup>33</sup> 見るという活動が学習により豊かになることを、ショーペンハウアーは繰り返し主張している。例えば、「眼の活動の両極への配分に過ぎない色彩が対象に移ること」(WIS. 14f.)も、直観の習得の一例とされる。

付記 小論は2013年9月の「第10回ニーチェ研究者の集い」における口頭発表の原稿を改稿したものである。